

**平成 23 年度**  
**全学英語カリキュラム改定について**

The 2011 English Language Curriculum

**第 3 回英語教育改革 FD 報告書**

3<sup>rd</sup> English Education Reform Faculty Development Meeting

新潟大学 全学教育機構 英語教育企画開発室

# 平成23年度 全学英語カリキュラム改定について

第3回英語教育改革FD（平成22年2月15日）

## 目 次

I. 新カリキュラムの概要	1 ページ
II. 新時間割について	7 ページ
III. 日本人教員担当科目について	13 ページ
IV. 外国人教員担当科目について	17 ページ
● Academic Listening	17 ページ
● Academic Writing	25 ページ
V. 質疑応答	29 ページ

# I. 新カリキュラムの概要

平野幸彦（人文社会・教育科学系准教授、英語教育企画開発室代表）

全学英語教育については、平成 17 年度から現行カリキュラムが実施されている。CALL 教材や統一副教材の採用、全学一斉 TOEIC 受験による効率的な履修といった新機軸を導入することにより、大部分の学部においては 1 年次から 2 年次の前期にかけて週 1 コマの授業をとるかたちになっている。

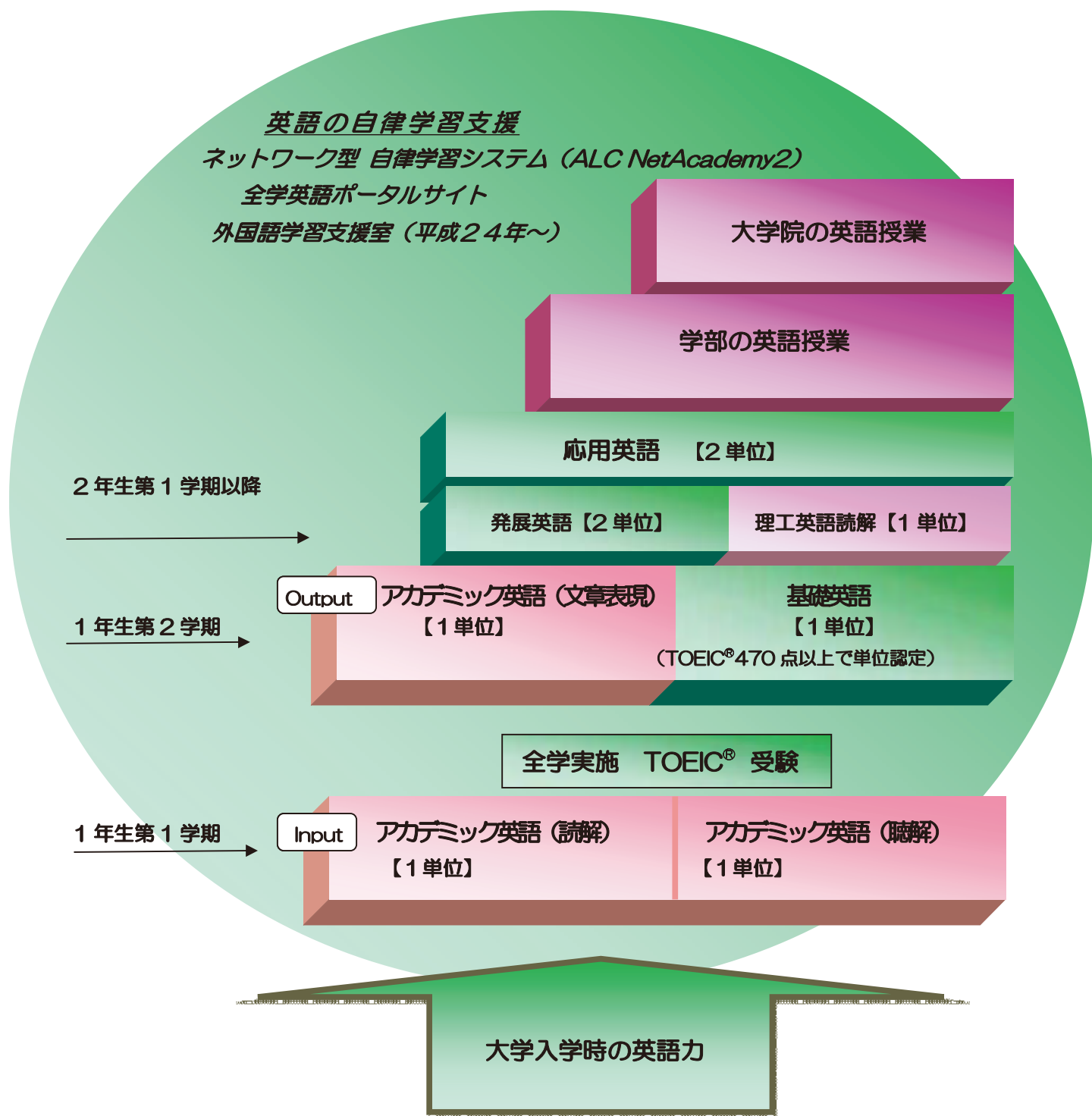
現在 5 年目であるが、その間、教員・学生の双方から、授業時間数が少なすぎるという不満の声が聞こえてきた。そこで平成 23 年度を目途にカリキュラム改定を計画し、このたび原案がまとまった。

本カリキュラム改定の要点は、クラスサイズ（学生定員）と開講時期の見直しにより、総開講コマ数を大きく変えることなく、1 年次での授業回数を週 2 回（通年 4 コマ）とし、合わせて授業の内容も、本学の英語教育の主目標である「学術目的の英語」により即したものとすることにある（より具体的には、当日配付資料「平成 23 年度カリキュラム改定の要点」および「平成 23 年度新潟大学全学英語カリキュラム」を参照）。

先生方には、授業担当曜限の変更や、カリキュラムの理念・目標に則した授業内容設計など、ご迷惑やお手数をおかけすることになると思うが、趣旨をご理解いただき、ご協力をお願いしたい。

【資料 1】

平成 23 年度 新潟大学 全学英語カリキュラム



- 紫 = 特定学術目的の英語 English for Specific Academic Purposes
- ピンク = 一般学術目的の英語 English for General Academic Purposes
- 緑 = 一般目的の英語 English for General Purposes



「自律と創生」を理念とする本学では、その一環として、ALC NetAcademy2「スーパースタンダードコース」と「スタンダードコース」を導入し、時間や場所を問わず自由にアクセスできる環境を全学生に提供しています。新カリキュラムでは、1年生がこの自律的な課外学習の習慣を身につけ、大学入学までに培った**一般目的の英語**の運用能力をさらに強化するよう支援することとします。ただし、自律学習の習慣化には、教員からのコンスタントな働きかけが必要であるため、教員が随時学習履歴をチェックし成績評価に組み入れるなどの作業を行うことになります。

1年生は、課外学習で強化した一般目的の英語の運用能力を1学期末にTOEIC® IPで測定し、自分の英語力を客観的に把握します。それに基づいて各自が具体的な目標を設定し、学習プランをデザインしていきます。この一連の自律学習を支援するため、英語教育企画開発室では、本年1月に「全学英語ポータルサイト」を立ち上げました。さらに、数年後には「外国語学習支援室（仮称）」を開設する計画です。

一方、対面授業では、あらゆる専門に共通する**一般学術目的の英語**を扱い、大学生にふさわしい思考力や表現力の養成を目標とします。一般目的の英語の運用能力を土台として、学部・大学院での**特定学術目的の英語**への橋渡しとなる基礎力の養成を目指します。

※ おおよそのクラス定員

➤ アカデミック英語（読解）	40（主に日本人教員担当）
➤ アカデミック英語（聴解）	40（主に外国人教員担当）
➤ アカデミック英語（文章表現）	30（主に外国人教員担当）
➤ 基礎英語	40（主に日本人教員担当）
➤ 応用英語	15（日本人・外国人教員担当）

※ ただし、初年度1学期のみ、アカデミック英語（読解）、およびアカデミック英語（聴解）は定員を上回る予定。

※ 全学英語ポータルサイト <http://verba.ge.niigata-u.ac.jp/english/>

（大学ホームページからも、「在学生の皆さんへ」→「授業関連情報はこちらへ」→「全学英語ポータルサイト」でアクセスできます。）

## 2011 New English Language Curriculum for 1<sup>st</sup> and 2<sup>nd</sup> Year Students



- Purple** = ESAP: English for Specific Academic Purposes
- Pink** = EGAP: English for General Academic Purposes
- Green** = EGP: English for General Purposes

With 'Autonomy and Creation' as its educational principle, Niigata University has created a self-directed English language learning environment for its undergraduates by offering ALC NetAcademy2, an online learning program that they can access anytime, anywhere. Through the program, they can continue to improve their skills that they acquired in their high school classes for **English for General Purposes**.

As 1<sup>st</sup>-year students form a habit of autonomous learning, they are given an opportunity to objectively measure their general proficiency by TOEIC at the end of their 1<sup>st</sup> semester. From then on, they are encouraged to design their own study plans for the coming years. In order to further facilitate self-directed learning, a website has been launched, and a self-access center will be opened in a few years.

Taught classes for the 1<sup>st</sup>- and 2<sup>nd</sup>-year students, on the other hand, are designed to address **English for General Academic Purposes**. Students are guided to develop critical thinking, along with basic academic reading, listening and writing skills. These skills will be exploited and further developed in classes for **English for Specific Academic Purposes** in their final years of university education.

※ The following is the approximate student class load for each course:

- Academic Reading: 40 (taught mostly by Japanese teachers)
- Academic Listening: 40 (taught mostly by native-speaker teachers)
- Academic Writing: 30 (taught mostly by native-speaker teachers)
- Basic English: 40 (taught mostly by Japanese teachers)
- Applied English: 15 (a variety of topics and skills, including oral presentations, taught by both Japanese and native-speaker teachers)

※ In the first semester of 2011, the number of students in the Academic Reading and Academic Listening classes will actually be over the stated number.

“Zengaku Eigo Portal Site” <http://verba.ge.niigata-u.ac.jp/english/>

## II. 新時間割について

恩田公夫 （人文社会・教育科学系教授）

今回のカリキュラム改定では、全学共通英語全体の開講コマ数（クラス数）はほとんど変えずに、1 年生が週 2 回の英語を履修することになる。そのため、これまでは週の前半、特に月曜、火曜に集中していた英語クラスが、月曜から金曜まで、1 限から 4、5 限まで、開講される。これに伴い、特に非常勤講師の先生方には、従来の担当曜限からの移動をお願いしなければならないケースが増えることになる。また、特に新カリキュラムに移行する初年度（平成 23 年度）に関しては、前期に、現行カリキュラムが適応されている 2 年生向けに、発展英語を大量に開講しなければならない。そのために、平成 23 年度前期に限って 1 クラス当たりの定員を増やすなどの対応をとる予定である。また、新カリキュラム実施初年度と 2 年目でも各曜限の開講科目やコマ数が変化するため、平成 24 年度にも、非常勤、専任を問わず、先生方にはもう一度担当クラスの大規模な移動をお願いすることが避けられない。

これまで理学部・工学部の 1 年生向けに開講されていた「理工英語読解」は、平成 23 年度は開講せず、平成 24 年度以降、2 年生向け科目として開講する。その開講曜限が、現在の木曜 1、2 限、金曜 3 限から、火曜 1、2、4 限に移動する。このため、これまで「理工英語読解」を担当していただいた先生方には、担当曜限を移っていただくか、あるいはこれまでの担当曜限で、「アカデミック英語（読解）」、「基礎英語」をご担当していただく、といったお願いをしなければならない。

時間割の原案を作るに当たっては、前期と後期の開講コマ数に大きな差が出ないように配慮はしているが、様々な理由からどうしてもある程度の偏りが生じることは避けられない。再履修者用クラスや上級者向けの「応用英語」（23 年は開講せず、24 年度から再開）といった、開講曜限にあまり制約がない科目の配置を工夫することによって、前期と後期の偏りをできるだけ小さくしていきたいと考えている。

この時間割（案）はあくまでも現時点での暫定的な案であり、今後、各学部との話し合いや初修外国語との調整等で、各学部に割り当てられている曜限や、各曜限で開講するクラスの種類やクラス数に変更される可能性がある。

以上のように、今回のカリキュラム改定では、時間割が大きく変わる。また、平成 23 年度と 24 年度でもかなりの変更が生じる。そのため、担当曜限の調整等で、とりわけ非常勤の先生方には多大なご迷惑をおかけすることになると思われるが、先生方のご協力をお願いする次第である。

【資料 2】

平成23年度 全学英語 時間割 (案)

月曜		火曜		水曜		木曜		金曜	
第1学期	第2学期	第1学期	第2学期	第1学期	第2学期	第1学期	第2学期	第1学期	第2学期
<b>医学部 (医) :</b> AL(1)/AR(2)  <b>歯学部 :</b> AL(2)  <div>歯学部:発展英語(2)</div>	<b>医学部 (医) :</b> AW(2)  <b>歯学部 :</b> AW(2)  <div>歯学部:発展英語(2)</div>	<b>理学部 :</b> AL(3)/AR(1)  <small>理学部: 発展英語(6)</small>	<b>理学部 :</b> AW(6)	<b>教育学部 (除学教) :</b> AL(1)/AR(2)	<b>教育学部 (除学教) :</b> BE(4)	<b>工学部 (機化機) :</b> AL(1)/AR(4)  <b>医学部 (保 A) :</b> AL(2)  <b>医学部 (保 A) :</b> AW(3)	<b>工学部 (機化機) :</b> BE(6)  <b>工学部 (機化機) :</b> BE(7)  <b>医学部 (保 A) :</b> AR(2)  <b>医学部 (保 B) :</b> AR(2)	<b>医学部 (医) :</b> AL(2)/AR(1)  <b>歯学部 :</b> BE(1)  <b>歯学部 1年生: 発展英語(2)</b>  <b>医学部 (保 B) :</b> BE(2)	<b>医学部 (医) :</b> AW(2)
<b>農学部 :</b> AL(3)/AR(1)  <small>農学部: 発展英語(6)</small>	<b>農学部 :</b> AW(6)	<b>工学部 (機化機) :</b> AL(4)/AR(2)  <small>工学部 (機化機): 発展英語(8)</small>	<b>工学部 (機化機) :</b> AW(9)	<b>教育学部 (学教) :</b> AL(2)/AR(3)	<b>教育学部 (学教) :</b> BE(5)	<b>工学部 (機化機) :</b> AL(2)/AR(4)  <b>工学部 (機化機) :</b> BE(3)	<b>工学部 (機化機) :</b> BE(4)  <b>工学部 (機化機) :</b> BE(7)	<b>法学部 :</b> AL(3)  <b>医学部 (保 A) :</b> AR(2)  <b>医学部 (保 A) :</b> AW(3)	<b>法学部 :</b> BE(2)  <b>法学部 1年生: 発展英語(4)</b>  <b>医学部 (保 A) :</b> BE(2)
<b>教育学部 (除学教) :</b> AL(2)/AR(1)  <small>教育学部 (除学教): 発展英語(4)</small>  <div>医学部 (保) : 発展英語(2)</div>	<b>教育学部 (除学教) :</b> AW(5)  <div>医学部 (保) : 発展英語(2)</div>	<b>人文学部 :</b> AL(4)/AR(1)  <small>人文学部: 発展英語(6)</small>	<b>人文学部 :</b> AW(8)	<b>経済学部 (経) :</b> AL(2)/AR(2)  <small>経済学部 (経): 発展英語(5)</small>	<b>経済学部 (経) :</b> AW(6)	<b>人文学部 :</b> AL(1)/AR(4)	<b>人文学部 :</b> BE(4)	<b>理学部 :</b> AL(1)/AR(3)	<b>理学部 :</b> BE(5)
<b>教育学部 (学教) :</b> AL(3)/AR(2)  <small>教育学部 (学教): 発展英語(6)</small>  <div>医学部 (保) : 発展英語(2)</div>	<b>教育学部 (学教) :</b> AW(8)  <div>医学部 (保) : 発展英語(2)</div>	<b>工学部 (機化機) :</b> AL(4)/AR(1)  <small>工学部 (機化機): 発展英語(6)</small>	<b>工学部 (機化機) :</b> AW(7)	<b>経済学部 (営) :</b> AL(2)/AR(1)  <small>経済学部 (営): 発展英語(3)</small>	<b>経済学部 (営) :</b> AW(4)	<b>経済学部 (営) :</b> AL(1)/AR(2)	<b>経済学部 (営) :</b> BE(3)	<b>農学部 :</b> AL(1)/AR(3)	<b>農学部 :</b> BE(4)
<div>医学部 (保) : 発展英語(2)</div>	<div>医学部 (保) : 発展英語(2)</div>	<b>法学部 :</b> AR(3)  <small>法学部: 発展英語(6)</small>	<b>法学部 :</b> AW(5)  <small>法学部: 発展英語(4)</small>			<b>経済学部 (経) :</b> AL(2)/AR(2)	<b>経済学部 (経) :</b> BE(3)		

\*AL=アカデミック英語 (聴解)、AR=アカデミック英語 (読解)、AW=アカデミック英語 (文章表現)、BE=基礎英語

\*イタリックで表示した発展英語は2年次向け。さらに□で囲んだ発展英語は旭町キャンパス開講。

\*上記以外に、学部指定なしの再履修者向けの科目が18コマ程度開講予定。経済学部夜間主コースは木6、7に前期、後期開講 (詳細は別途記載)。

# ENGLISH CLASS TIMETABLE (PLAN) for 2011

	MONDAY		TUESDAY		WEDNESDAY		THURSDAY		FRIDAY	
	1st Semester	2nd Semester	1st Semester	2nd Semester	1st Semester	2nd Semester	1st Semester	2nd Semester	1st Semester	2nd Semester
1	<b>MEDICINE:</b> AL(1)/AR(2)	<b>MEDICINE:</b> AW(2)  <b>DENTISTRY:</b> AW(2) <div>DENTISTRY: AE (2)</div>	<b>SCIENCE:</b> AL(3)/AR(1)  SCIENCE: AE(6)	<b>SCIENCE-AW(6)</b>	<b>EDUCATION(B):</b> AL(1)/AR(2)	<b>EDUCATION(B):</b> BE(4)	<b>TECHNOLOGY(B):</b> AL(1)/AR(4)  <b>Health Sciences(A):</b> AL(2)	<b>TECHNOLOGY(B):</b> BE(6)  <b>Health Sciences(A):</b> AW(3)	<b>MEDICINE:</b> AL(2)/AR(1)  <b>DENTISTRY:</b> AR(2)  <b>Health Sciences(B):</b> AR(2)	<b>MEDICINE:</b> AW(2)  <b>DENTISTRY:</b> BE(1)  DENTISTRY (1st year students): AE (2)  <b>Health Sciences(B):</b> BE(2)
2	<b>AGRICULTURE:</b> AL(3)/AR(1)  AGRICULTURE: AE(5)	<b>AGRICULTURE:</b> AW(6)	<b>TECHNOLOGY(A):</b> AL(4)/AR(2)  TECHNOLOGY(A): AE(8)	<b>TECHNOLOGY(A):</b> AW(9)	<b>EDUCATION(A):</b> AL(2)/AR(3)	<b>EDUCATION(A):</b> BE(5)	<b>TECHNOLOGY(A):</b> AL(2)/AR(4)  <b>Health Sciences(B):</b> AL(2)	<b>TECHNOLOGY(A):</b> BE(7)  <b>Health Sciences(B):</b> AW [3]	<b>LAW:</b> AL(3)  <b>Health Sciences(A):</b> AR(2)	<b>LAW:</b> BE(2)  LAW(1st year students): AE(4)  <b>Health Sciences(A):</b> BE(2)
3	<b>EDUCATION(B):</b> AL(2)/AR(1)  EDUCATION(B): AE(4) <div>HEALTH SCIENCES: AE(2)</div>	<b>EDUCATION(B):</b> AW(5) <div>HEALTH SCIENCES: AE(2)</div>	<b>HUMANITIES:</b> AL(4)/AR(1)  HUMANITIES: AE(5)	<b>HUMANITIES:</b> AW(8)	<b>ECONOMICS:</b> AL(2)/AR(2)  ECONOMICS: AE (5)	<b>ECONOMICS:</b> AW(6)	<b>HUMANITIES:</b> AL(1)/AR(4)	<b>HUMANITIES:</b> BE(4)	<b>SCIENCE:</b> AL(1)/AR(3)	<b>SCIENCE:</b> BE(5)
4	<b>EDUCATION(A):</b> AL(3)/AR(2)  EDUCATION(A): AE (6) <div>HEALTH SCIENCES: AE(2)</div>	<b>EDUCATION(A):</b> AW(8) <div>HEALTH SCIENCES: AE(2)</div>	<b>TECHNOLOGY(B):</b> AL(4)/AR(1)  TECHNOLOGY(B): AE(6)	<b>TECHNOLOGY(B):</b> AW(7)	<b>MANAGEMENT:</b> AL(2)/AR(1)  MANAGEMENT: AE (3)	<b>MANAGEMENT:</b> AW(4)	<b>MANAGEMENT:</b> AL(1)/AR(2)	<b>MANAGEMENT:</b> BE(3)	<b>AGRICULTURE:</b> AL(1)/AR(3)	<b>AGRICULTURE:</b> BE(3)
5			<b>LAW:</b> AR(3)  LAW: AE (6)	<b>LAW:</b> AW(5)  LAW: AE (4)			<b>ECONOMICS:</b> AL(2)/AR(2)	<b>ECONOMICS:</b> BE(3)		

\* AL=Academic Listening; AR=Academic Reading; AW=Academic Writing; BE=Basic English; AD=Advanced English; □=Asahi-machi Campus; *Italics=2nd year students*



平成24年度 全学英語 時間割 (案)

	月曜			火曜			水曜			木曜			金曜	
	第1学期	第2学期		第1学期	第2学期		第1学期	第2学期		第1学期	第2学期		第1学期	第2学期
1	医学部 (医) : AL(1)/AR(2)  歯学部 : AL(2)  歯学部 2 年生 : 発展英語(2)	医学部 (医) : AW(2)  歯学部 : AW(2)	理学部 : AL(5)  理学部 : 理工英語読解 (5)	教育学部 (除学教) : AL(4)	教育学部 (除学教) : AW(5)	理学部 : AW(6)  理学部 : 理工英語読解 (5)	教育学部 (除学教) : AL(4)	教育学部 (除学教) : AW(5)	工学部 (機化機) : AR(6)  医学部 (保 A) : AL(2)	工学部 (機化機) : BE(6)  医学部 (保 A) : AW(3)	医学部 (医) : AL(2)/AR(1)  歯学部 : AR(2)  医学部 (保 B) : AR(2)	医学部 (医) : AW(2)  歯学部 : BE(1)  歯学部 1 年生 : 発展英語(2)	医学部 (保 B) : BE(2)	医学部 (医) : AW(2)
2	農学部 : AL(4)	農学部 : AW(6)	工学部 (電情建福) : AL(7)  工学部 (機情建福) : 理工英語読解(7)	教育学部 (学教) : AL(6)	教育学部 (学教) : AW(8)	工学部 (電情建福) : AW(9)  工学部 (機情建福) : 理工英語読解(7)	工学部 (学教) : AL(6)	教育学部 (学教) : AW(8)	工学部 (電情建福) : AR(7)  医学部 (保 B) : AL(2)	工学部 (電情建福) : BE(7)  医学部 (保 B) : AW(3)	法学部 : AL(4)  医学部 (保 A) : AR(2)	法学部 : AW(5)  医学部 (保 A) : BE(2)	法学部 : BE(5)	法学部 : AW(5)
3	教育学部 (除学教) : AR(4)	教育学部 (除学教) : BE(4)	人文学部 : AL(6)	経済学部 (経) : AL(4)	経済学部 (経) : AW(6)	人文学部 : AW(8)	経済学部 (経) : AL(4)	経済学部 (経) : AW(6)	人文学部 : AR(6)	人文学部 : BE(4)	理学部 : AR(5)	理学部 : BE(5)	理学部 : BE(5)	理学部 : BE(5)
4	教育学部(学教) : AR(6)	教育学部 (学教) : BE(5)	工学部 (機化機) : AL(6)  工学部 (電化機) : 理工英語読解(5)	工学部 (機化機) : AL(3)	経済学部 (営) : AW(4)	工学部 (機化機) : AW(7)  工学部 (電化機) : 理工英語読解(5)	経済学部 (営) : AL(3)	経済学部 (営) : AW(4)	経済学部 (営) : AR(3)	経済学部 (営) : BE(3)	農学部 : AR(4)	農学部 : BE(4)	農学部 : BE(4)	農学部 : BE(4)
5			法学部 : AR(4)  法学部 2 年生 : 発展英語(4)			法学部 : BE(2)  法学部 1 年生 : 発展英語(4)			経済学部 (経) : AR(4)	経済学部 (経) : BE(3)				

\*AL=アカデミック英語 (聴解)、AR=アカデミック英語 (読解)、AW=アカデミック英語 (文章表現)、BE=基礎英語

\*イタリックで表示した発展英語は2年次向け。さらに□で囲んだ発展英語は旭町キャンパス開講。

\*上記以外に、学部指定なしの応用英語、再履修者向けの科目が合計30コマ程度開講予定。経済学部夜間主コースは木6、7に前期、後期開講 (詳細は別途記載)。

# ENGLISH CLASS TIMETABLE (PLAN) for 2012

	MONDAY		TUESDAY		WEDNESDAY		THURSDAY		FRIDAY	
	1st Semester	2nd Semester	1st Semester	2nd Semester	1st Semester	2nd Semester	1st Semester	2nd Semester	1st Semester	2nd Semester
1	<b>MEDICINE:</b> AL(1)/AR(2)	<b>MEDICINE:</b> AW(2)  <b>DENTISTRY:</b> AW(2)	<b>SCIENCE:</b> AL(5) <i>SCIENCE: EST(5)</i>	<b>SCIENCE:</b> AW(6) <i>SCIENCE: EST(5)</i>	<b>EDUCATION(B):</b> AL(4)	<b>EDUCATION(B):</b> AW(5)	<b>TECHNOLOGY(B):</b> AR(6)  <b>Health Sciences(A):</b> AL(2)	<b>TECHNOLOGY(B):</b> BE(6)  <b>Health Sciences(A):</b> AW(3)	<b>MEDICINE:</b> AL(2)/AR(1)  <b>DENTISTRY:</b> AR(2)  <b>Health Sciences(B):</b> AR(2)	<b>MEDICINE:</b> AW(2)  <b>DENTISTRY:</b> BE(1)  DENTISTRY (1st year students): AE (2)  <b>Health Sciences(B):</b> BE(2)
2	<b>AGRICULTURE:</b> AL(4)	<b>AGRICULTURE:</b> AW(6)	<b>TECHNOLOGY(A):</b> AL(7) <i>TECHNOLOGY(A): EST(7)</i>	<b>TECHNOLOGY(A):</b> AW(9) <i>TECHNOLOGY(A): EST(7)</i>	<b>EDUCATION(A):</b> AL(6)	<b>EDUCATION(A):</b> AW(8)	<b>TECHNOLOGY(A):</b> AR(7)  <b>Health Sciences(B):</b> AL(2)	<b>TECHNOLOGY(A):</b> BE(7)  <b>Health Sciences(B):</b> AW(3)	<b>LAW:</b> AL(3)  <b>Health Sciences(A):</b> AR(2)	<b>LAW:</b> BE(2)  LAW(1st year students): AE(4)  <b>Health Sciences(A):</b> BE(2)
3	<b>EDUCATION(B):</b> AR(4)	<b>EDUCATION(B):</b> BE(4)	<b>HUMANITIES:</b> AL(6)	<b>HUMANITIES:</b> AW(8)	<b>ECONOMICS:</b> AL(4)	<b>ECONOMICS:</b> AW(6)	<b>HUMANITIES:</b> AR(6)	<b>HUMANITIES:</b> BE(4)	<b>SCIENCE:</b> AR(5)	<b>SCIENCE:</b> BE(5)
4	<b>EDUCATION(A):</b> AR(6)	<b>EDUCATION(A):</b> BE(5)	<b>TECHNOLOGY(B):</b> AL(6) <i>TECHNOLOGY(B): EST(5)</i>	<b>TECHNOLOGY(B):</b> AW(7) <i>TECHNOLOGY(B): EST(5)</i>	<b>MANAGEMENT:</b> AL(3)	<b>MANAGEMENT:</b> AW(4)	<b>MANAGEMENT:</b> AR(3)	<b>MANAGEMENT:</b> BE(3)	<b>AGRICULTURE:</b> AR(4)	<b>AGRICULTURE:</b> BE(4)
5			<b>LAW:</b> AR(4) <i>LAW: AE (4)</i>	<b>LAW:</b> BE(2) <i>LAW (1<sup>st</sup> year students): AE (4)</i>			<b>ECONOMICS:</b> AR(4)	<b>ECONOMICS:</b> BE(3)		

\* AL=Academic Listening; AR=Academic Reading; AW=Academic Writing; BE=Basic English; AD=Advanced English; EST=English for Science & Technology; □=Asahi-machi Campus;  
*Italics=2nd year students*



### Ⅲ. 日本人教員担当科目について

ハドリー浩美（全学教育機構准教授）

#### 1. 全学英语の位置づけ

英語教育企画開発室では、先行研究に倣い、各段階で扱う英語を目的別に次のように分類している。

- 中学・高校： English for General Purposes (EGP: いわゆるコミュニケーション英語を含む、一般目的の英語)
- 全学英语： English for General Academic Purposes (EGAP: あらゆる専門分野に共通する基礎的な学術英語)
- 学部・大学院： English for Specific Academic Purposes (ESAP: 特定の専門分野の学術英語)

本学の英語教育では、中学・高校で習得した一般的な英語力を土台として、研究に資する英語の運用能力養成を目標としている。全学英语では、学士課程専門教育や大学院教育への準備段階として、各専門分野に共通する言語技能および思考力・表現力を涵養する。具体的には、比較的平易な文献の読み方、レポートの書き方、講義のノートの取り方、口頭での質問や発表の仕方などの基礎力養成を目指す。

一方、本学の理念である「自律と創生」の一環として、ALC NetAcademy2「スーパースタンダードコース」と「スタンダードコース」を導入し、時間や場所を問わず自由にアクセスできる環境を全学生に提供している。新カリキュラムでは、1年生がこの自律的学習の習慣を身につけ、大学入学までに培った一般目的の英語（EGP）の運用能力をさらに強化するよう支援する。特に、自律学習が習慣化するまでは、教員からのコンスタントな働きかけが必要となるため、全学英语担当教員が随時学習履歴をチェックして成績評価に組み入れるなどの作業を行うことになる。

1年生は、課外学習で強化した一般目的の運用能力を1学期末にTOEIC® IPで測定し、自分の英語力を客観的に把握する。それに基づいて各自が具体的な目標を設定し、学習プランをデザインしていく。この一連の自律学習を支援するため、英語教育企画開発室では、本年1月に「全学英语ポータルサイト」を立ち上げた。さらに数年後には「外国語学習支援室（仮称）」を開設する計画である。

#### 2. 「アカデミック英語（読解）」

「アカデミック英語（読解）」（ひとクラス約40名）は、現行の「共通英語」に代わ

り、1 年次第 1 学期に開講される。1 単位科目であるため、1 回の授業に対して、60 分の予習・復習が求められることになる。「アカデミック英語（読解）」では、学問の場としての大学に入学した者にふさわしい内容で現代の英語で書かれた教材を活用し、主に内容を正確に把握して理論的かつ批判的に思考する基礎力を育成することを目的とする。教材や教授法については、担当教員の裁量に委ねるが、一般的なコミュニケーション能力養成を目的としたテキストや、専門性が高く難解なテキストは対象外とする。教える側、学ぶ側双方にとって、担当教員の専門に関連があり、比較的平易な英語で書かれたものが理想的といえよう。

たとえば、教員の専門が英語教育であれば、国際共通語もしくは国際補助語としての英語について比較的平易な英語で書かれた論説文を教材とし、言語と文化、アイデンティティー、言語の消滅などについて批判的な思考を促す。同時に、言語技能としては、ディスコース・マーカーに着目して理論の展開を把握させ、文章全体やパラグラフの構造を理解させる。さらに、Skimming, Scanning, Inferencing 等の読解ストラテジーを習得させるといった授業が考えられよう。

同様に、専門が文学なら文学作品を用いて行間を読み取らせたり、言語学なら語源を扱ってことばのおもしろさに気付かせたりするなどの授業もできるのではないだろうか。また、工夫次第で市販のテキストも活用できると思われる。

さて、現行の「共通英語」では、1 年生が 1 学期末に受験することになっている TOEIC<sup>®</sup> IP の「場慣れ」として、リスニングの練習にも授業時間を割いているが、新設の「アカデミック英語（読解）」では授業中には行わない。その代わり、NetAcademy2 を課外学習させる。自律的に学習する習慣が確立するまで、その動機付けとなるよう、NetAcademy2 の課外学習状況を「アカデミック英語（読解）」の成績評価に組み入れることとなる。

ひとことで言うと、前回の FD で人文学部の福田先生がおっしゃっていたように、単なる高校の延長ではなく、いかにも大学の授業だなあ、と学生に思ってもらえるような、そしてそれが英語学習への新たな動機付けとなるような授業にしていきたいと願っている。

### 3. 「基礎英語」

最後に「基礎英語」（ひとクラス約 40 名）について簡単に説明を加える。これは、1 年次第 2 学期に提供される 1 単位科目で、内容的には現行の「基礎英語」とほとんど変わらない。対象は、1 年次第 1 学期末の TOEIC<sup>®</sup> IP で 470 点に満たなかった学生で、一般学術目的の英語（EGAP）の土台となる基礎的な読解力を養成する。文法や語彙の指導も含まれる。教材や教授法は、担当教員の裁量に委ねる。また、従来通り、NetAcademy2 の課外学習を成績評価に組み込むものとする。

## 参考文献：

- Dudley-Evans, T. & St John, M.J. (1998) *Developments in English for Specific Purposes*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 深山晶子（編）（2000）『ESP の理論と実践』東京, 三修社.
- 平野幸彦, 高橋歩, ハドリー浩美(2002)「国際基督教大学における英語教育」, 『新潟大学教育研究年報』第7号, pp. 58-65.
- Jordan, R.R. (1997) *English for Academic Purposes*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 桂山康司 (2008)「京都大学における『英語』」, 『京都大学高等教育研究』第14号, pp. 23-131.
- 京都大学大学院人間・環境学研究科英語部会、京都大学高等教育研究開発推進機構  
(2006)『学術研究に資する英語教育：京都大学における英語新カリキュラム』京都, 京都大学共通教育推進部共通教育推進課.
- Markee, N. (1997) *Managing Curricular Innovation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 岡田圭子 (2009)「General で Academic な共通英語教育とは」, 『英語教育』Vol. 57, No. 11, pp. 22-24.
- Richards, J.C. (2006) *Communicative Language Teaching Today*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ストレイン・ソニア園子 (2006) *A Friendly Approach to English for Academic Purposes*. 東京, 松柏社.
- 田地野彰 (2004)「日本における大学英語教育の目的と目標について」, 『MM NEWS』No. 7, pp.11-21.
- 田地野彰 (2005)「一般学術目的の英語(EGAP)のコース設計に向けて」, 『MM NEWS』No. 8, pp. 42-48.
- 田地野彰 (2008)「英語学術論文執筆のための教材開発に向けて」, 『京都大学高等教育研究』第14号, pp.111-121.
- 竹蓋幸生, 水光雅則（編）(2005)『これからの大学英語教育』東京, 岩波書店.
- Turner, J. (2004) 'Language as Academic Purpose.' *Journal of English for Academic Purposes*. No. 3, pp.95-109.

## Ⅳ.外国人教員担当科目について

### Academic Listening

Carmen Hannah

Associate Professor, The Institute of Undergraduate Programs and Courses

#### **1. Chronological & Structural Overview**

In April 2011, the existing General English Language Education curriculum in Niigata University will be replaced with a new curriculum which has ‘autonomy and creation’ as the guiding educational principle. All new students entering Niigata University will be required to attain 4 English language credits under the theme of English for General Academic Purposes, in order to graduate: Academic Reading; Academic Listening; Academic Writing; TOEIC 470+ or Basic English.

##### **1.1 First Semester**

In the first semester, the new students will be streamed according to their entrance exam results into classes based on linguistic ability. Each class of 40 students will take an Academic Reading class (which will be taught by a Japanese teacher) and also an Academic Listening class (taught by a native English speaker) which will account for 2 of the 4 required English Language credits. Each class of students will meet twice a week (once with their Japanese teacher and once with their native English speaker teacher) which may help facilitate intra-class bonding which could lead to smoother class management due to the increase of student-student class contact time. At the end of first semester all students will take the TOEIC examination which will be used as the basis of the academic streaming of students for the second semester.

##### **1.2 Second Semester**

In the second semester, the students will be required to attain 2 more English Language credits. A score of 470+ on the TOEIC test will be counted as one academic credit which means taking only the Academic Writing class (taught by native English speaker teachers) to obtain the final credit. A TOEIC score of less than 470 means taking the Academic Writing class and the Basic English class (taught by Japanese teachers) in

order to receive the two required credits. Having achieved all 4 compulsory language credits by the end of the first academic year, students are free to pursue their English language studies electively as and when they deem appropriate.

### **1.3 Streaming**

For all English language classes students will be streamed into three general level categories, Beginner, Intermediate and Advanced. Within each of these three general categories there will be further sub-divisions so that students should be together with people of very similar academic ability. This narrow range ability grouping will hopefully facilitate easier teaching in terms of selection and preparation of more universally appropriate course materials as well as pitching the level of difficulty and pacing of the class.

### **1.4 Pre-assignment**

From April 2011, current 'sign-up' system will cease to exist and each teacher will be given their classes into which students will have been pre-assigned. Thus from the very start of term, classes will be fixed meaning that the course introduction and or explanation need only be done once and lessons can start properly from week two. (Due to unforeseen scheduling conflicts between the General English Education courses and compulsory courses run by each faculty, please allow for some limited movement by individual students during the first week of each semester.)

## **2. English for General Academic Purposes (EGAP)**

The main goal of English Listening for Academic Purposes (EAP) is to assist non-native English speaking students to prepare to attend college or university in an English speaking country. As most students in Niigata University are not actually planning to study abroad full time the new curriculum will follow the guiding principles of English for General Academic Purposes.

Within the Niigata University setting it is envisioned that students will be serviced with an education in English Language that improves both general language ability as well as dealing with the academic nature of the institution. Therefore, in terms of the aural skills and abilities the students need to develop there is some overlap with EAP, as in EGAP the aim is moving towards providing a more academic focus to the content of the English Language materials being used in class.



## **2.1 Course Content**

The content for Academic Listening classes will not be pre-specified by the university and each individual teacher is free to design and execute lessons within the framework of EGAP. As the students are just beginning their tertiary education they have only rudimentary knowledge of their chosen academic field so this is where the “General” in EGAP comes into focus. Course content should aim to provide the students with information on a “General” area or areas of knowledge such as history, science, business, social science, cultural perspectives etc. and be less geared towards “everyday conversational” topics.

One example of how this may be achieved is that as classes are being streamed not only according to academic linguistic ability but also academic faculty, content material may include (at a not too specific level of detail) language that may be related to that particular academic discipline.

## **3. Academic Listening – 4 General Principles**

Research within the field of second language education has provided much information on how and what to teach in the classroom (Douglas Brown 1994, Nunan 1995, Harmer 1998). In terms of Academic Listening, Brown (2006) highlights 4 general principles which may be of relevance when designing and executing Academic Listening classes in Niigata University. The four principles are Activation of Prior Knowledge; Systematic Presentation; Integration with Real World Information; Extensive Listening Leading to Personalized Speaking.

### **3.1 Activation of Prior Knowledge**

Activation of prior knowledge involves three central concepts which stem from the cognitive view of language learning. These are: Schema; Scripts, Top-down & Bottom-up Processing

#### **3.1.1 Schema**

Schema (or schemata) are abstract generalized mental representations of our experiences. It is information that we have already acquired that when activated can be applied to a new situation.

In terms of the new student intake their schema related to their chosen academic specialism may be somewhat limited hence the reason that the informational content of the Academic Listening courses should not be too specialized. It should rather be based

on more general academic concepts or subjects around which 1<sup>st</sup> year university students may have some existing schema to be activated.

### **3.1.2 Scripts**

Scripts are predictable (linguistic) sequences of events whereby students have expectations of the type of language that they will hear. An example of this may be listening to a conversation of a student trying to order a textbook from the university bookshop.

### **3.1.3 Top-down & Bottom-up Processing**

The last concept to be aware of are the joint notions of Top-down Processing (use of previous knowledge to understand the meaning) and Bottom-up Processing (assembling the meaning from sounds, words and sentences).

Top-down Processing is when students bring previously acquired knowledge to the listening event which assists them to interpret and understand the meaning of what is being said. Bottom-up Processing on the other hand involves the students using information they have about the sounds and words they hear to assemble or construct an understanding of what is being listened to. Both Top-down and Bottom-up Processing often occur simultaneously but can be focused on separately and are often treated quite well in recent course textbooks.

## **3.2 Systematic Presentation**

The second of the four general principles is the need for Systematic Presentation of the course material. This principle applies to all fields of pedagogy but specifically for an Academic Listening course the presentation follows three linear stages : Pre-listening; While Listening; Post Listening.

### **3.2.1 Pre-listening**

In the Pre-listening stage of any activity the students are given a purpose for listening. It is having a purpose for listening that creates the fundamental difference between listening and hearing. Many current textbooks do engage the students in a variety of worthwhile pre-listening activities

### **3.2.2 While Listening**

The second stage, While Listening occurs while the students are actually doing the listening. In order to match the cognitive activity with the designated purpose they need to employ or practice a specific skill or set of skills to successfully complete the task.

### **3.2.3 Post Listening**

The final stage is Post Listening which ensures that the activity does not end as soon as the CD player is switched off. The students are required to react to the listening event in some way, either by engaging in personal processing of the audio event or by oral or written means. The types of activity in all three stages will vary greatly depending on the academic level of the students, the content of the audio material and the teaching style of the instructor.

### **3.3 Integration With Real World Information**

The third governing principle is based on the notion that listening events do not occur in a vacuum. The informational content, skills and abilities that the students obtain from their Academic Listening classes should connect with their current situation as university students but also be of potential use for their future as adults as part of the workforce. It is commonly held that connection between the classroom and a student's real life is an essential element required for motivation to study (Dornyei 2005). There are two main types of motivation : Instrumental Motivation ; Integrative Motivation.

#### **3.3.1 Instrumental Motivation**

Instrumental Motivation is connected to the fact that acquisition of knowledge is critical to passing the course to gain a credit which will eventually lead to graduation. By the tertiary stage of their academic life most students are very aware of the construct of Instrumental Motivation.

#### **3.3.2 Integrative Motivation**

The second type of motivation is Integrative Motivation. This construct is strongly connected with the idea that the knowledge gained in the classroom is actually something that can be put to use. This usage can be related to future university classes, post graduation working life or some other socio-cultural event. As Instrumental Motivation is (or should be) already present in the psyche of a university student it is perhaps Integrative Motivation that the Academic Listening classes can impact on, especially in terms of course content and application of knowledge.

### **3.4 Extensive Listening Leading to Personalized Speaking**

The final principle for consideration is related to how much speaking, reading or writing the students could or should be engaged in during their Academic Listening course.

As any language is comprised of 4 elements, listening speaking reading and writing and given that the whole is more than the sum of its parts, we might assume that in the



Academic Listening classes (where the main goal is to allow practice in the listening component of language in particular) there will be activities that have the students engaged in some or all of the other three disciplines.

Personally speaking, one of the main differences between what will be happening in the Academic Listening classes in 2011 and the Hatten Eigo (Advanced English) classes that are currently being taught is that any activities that are not directly classed as actual listening tasks should in some way be carried out to enhance and or facilitate the “While Listening” activities and the overall goal of improving student listening comprehension.

Many textbooks combine listening and speaking as the two are so closely linked. Whereas the “speaking” focused texts (which have been in common use in the Hatten Eigo (Advanced English) classes have activities to enhance the oral component of language and have the students produce speech, the Academic Listening materials selected should contain a variety of “non-listening” activities that are designed to promote better listening ability in terms of specific skills and overall comprehension.

In terms of the linguistic abilities and skills that may be deemed desirable, the ultimate goal of Academic Listening is to improve overall listening comprehension of the students so that they are better able to process and act on auditory input in a variety of academic contexts. As for the individual skills that students might acquire there are of course many that may be applicable at university level. A few examples might be Listening for specific information; Note-taking; Summarizing what has been heard; Drawing inferences; Guessing vocabulary from context but there are of course many, many more. In the new curriculum, it is at the discretion of the class teacher to select which aural abilities and skills will be focused on and how these will be dealt with in class.

#### **4. Textbooks**

The decision to use or not use a course textbook is entirely personal. There will be no mandate or recommended materials. There will however be a review of Academic Listening course textbooks available in the near future for those who may wish to use a textbook.

The review will focus on two general tenets 1) linguistic level appropriateness and 2) if the material is in keeping with the overall direction the university is taking in attempting to improve the academic nature of the language studies the students engage

in during their time in tertiary education.

## **5. Miscellaneous**

From April 2011, Hatten Eigo (Advanced English) classes will continue to be taught until all students can be phased-out of that curriculum. Therefore, please be aware that you may be asked to continue teaching some Hatten Eigo (Advanced English) classes as well as teaching the new Academic Listening and Academic Writing classes.

## **References**

- Brown, S. 2006. *Teaching Listening*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Dornyei, Z. 2005. *The psychology of the Language Learner : Individual Differences in Second Language Acquisition*. New Jersey : Lawrence Erlbaum Associates.
- Douglas Brown, H. 1994. *Teaching by Principles – An Interactive Approach to Language Pedagogy*. London : Prentice Hall.
- Nunan, D. 1995. *Language Teaching Methodology – A textbook for Teachers*. London : Prentice Hall.
- Harmer, J. 1998. *How to Teach English*. Essex : Longman.

# **Academic Writing**

George O'Neal

Associate Professor, The Institute of Undergraduate Programs and Courses

## **1. Academic Writing Course Goals**

Students arriving at Niigata University next year will be enrolled in a curriculum sharply different than the previous one. Advanced English courses will have been replaced with academic listening and writing courses. However, even though the adjective “academic” precedes both the “listening” and the “writing” courses, that doesn’t mean these courses are monolithic. The student body will be enrolled into three general levels determined by a pre-test. Lower scoring students will be assigned to the beginning course. Students who fared better on the test will be enrolled in progressively higher levels of academic writing.

The academic writing course has fairly limited and straight-forward goals, which depend on the students’ levels. The course goals (i.e., what the teacher needs to enable the students to be able to do by the time the course is finished) are as follows. Beginning students should be able to write a paragraph length academic essay. Intermediate students should be able to write a one-page length academic essay. Advanced students should be able to create an academic essay of more than one page of length. These goals are provisional at this point, and, of course, if your students can produce more (or better!) work, then by all means please let them. However, you should keep in mind the provisional goals of each class level when you begin the process of selecting your textbooks. Please notice the plural. You will more than likely have to develop at least two different courses for the academic writing class.

Fortunately, there are some great textbooks that cater to students at these levels. “Great sentences for great paragraphs” and “Great Paragraphs” are both designed for students at these levels. There is no mandated textbook, so you are free to choose what you will, but keep in mind that whatever textbooks you choose need to accommodate the ultimate (if still nebulously provisional) course goals.

## **2. Process, not Product**

A lot of things in life get dumbed down into oversimplified dichotomous categories. However, in real life, things are hardly, if ever, so cleanly cut. That said, I'm about to engage in the same process of diluting complicated issues into a couple of paragraphs worth of commentary. At this point, I would like to introduce two competing approaches to the pedagogy of Academic writing: Process-centered writing and Product-centered writing. As you can probably surmise from the title to this section, I will be arguing for the greater efficacy of one of these two approaches.

First, what is the difference? The central difference between these two approaches concerns the importance each attaches to the writing process itself: Process-centered writing places an enormous amount of weight on all of the intermediate writing stages between first setting down a pencil on paper (fingers to the keyboard!) and the finished final draft; Product-centered writing subjugates the entire slew of small endeavors the writing student struggles through on their way to the vagaries of the final draft. Put in another way, the process-oriented approach would claim that pre-writing, rough drafts, library research, peer review, and the final draft all warrant individual assessment; the product-oriented approach claims that only the final draft deserves any consideration.

Product-oriented writing teachers make such claims because the weighted assessment of the final draft vis-à-vis all other intermediary stages of writing reflects the real world. In other words, the boss doesn't care how much you struggled with your report: he only cares if the report is finished. This is a fair and legitimate criticism, which I will attempt to address below.

The Process-oriented writing teacher would claim that assessing the writing process just as vigorously as assessing the final draft ultimately produces better writers. Accordingly, the proverbial boss still gets a report on time, but the report writer probably put more thought into it. Furthermore, because the quality of the final draft reflects (however indirectly sometimes) the degree of effort put into it, one could assume that final drafts composed through a process-oriented curriculum would be better. This is especially so if the teacher manages to incentivize (can you detect my American Libertarian upbringing yet?) the writing process. That is, if the teacher makes sure that the students' grades reflect their efforts during the stages of writing antecedent to the final draft, the amount of effort students expend during the writing process proportionately increases. Accordingly, process-oriented writing can increase student integrative motivation (check C. Hannah's section) to create better academic essays.

### 3. Peer Review

There is a small, but cogent, coterie of English pedagogues in the TESOL world that advocate language learning theories derived from the golden era of Soviet psychology. Although one might be surprised, indeed shocked, to find “golden era” anywhere near the word “Soviet,” there were some gems of social thought that permeated outward. The approaches to teaching advocated by the modern clique of TESOLers that call themselves the “social constructivists” originate from a man called Vygotsky, who was an educational psychologist in Soviet Russia. For all of you who have heard of the “Zone of Proximal Development,” his name may ring a metaphorical bell or two.

“The Zone of Proximal Development” is basically—whenever you see the word “basically” anywhere, you can be assured that some type of oversimplification is at foot—the idea that people learn better when they are learning from peers. Essentially, people learn better when they do it with someone else who is qualified to facilitate the learning process than when people attempt to learn alone. That is, proximity to a font of knowledge helps the process along.

The “Social Constructivists” took the idea of the “Zone of Proximal Development” and applied it to academic writing pedagogy. The result was “Peer Review.” Peer Review is an activity in which students exchange rough drafts of their papers with other students in their peer group—fancy TESOL jargon for “group of students”—and each student takes a turn at editing the other students’ papers. Although this may sound like a simple group editing exercise, it’s actually quite a bit more than that. Students get more out of this than simple comments and grammar corrections. Peer Review reveals if the message a student wants to convey is actually getting across to someone else. Students will see, usually within a matter of minutes, if someone else is reading their papers as the writer intends. Furthermore, another subsidiary side-effect of the peer review process is that students will be funneled through another layer of checks, which should lead to better quality papers, and a concomitant decrease on the homework load to which the teacher is exposed.

Some small pointers: Peer Review should be used at least once for every paper the students submit. This way, the peer review process becomes part of the writing process itself. Furthermore, if the teacher can create some mechanism in which the peer review process is graded (hint! hint! Process-oriented writing!) the teacher can incentivize student peer review. That is, if students understand that the comments and advice they give to other students is part of their grade, they tend to take the process much more

seriously.

## References

- Campbell, A.P. (2003). Web logs for use with ESL classes. *The InternetTESL Journal*, 9(2). <http://iteslj.org/Techniques/Campbell-Weblogs.html>
- Carson, J. G., & Nelson, G. L. (1994). Writing groups: Cross-cultural issues. *Journal of Second Language Writing*, 3, 17-30.
- Casanave, C. P. (2003). Looking ahead to more sociopolitical oriented case study research in L2 writing scholarship (But should it be called “post process”?). *Journal of Second Language Writing*, 12, 85-102.
- Kroll, B. (2001). Considerations for teaching an ESL/EFL writing course. In M. Celce-Murcia (ed.), *Teaching English as a second or foreign language* (3<sup>rd</sup> ed., pp. 219-232). Boston: Heinle.
- Leki, I. (1990). Potential problems with peer responding in ESL writing classes. *CATESOL Journal*, 3, 5-19.
- Mendonca, C. O., & Johnson, K. E. (1994). Peer review negotiations: Revision activities in ESL writing instructions. *TESOL Quarterly*, 28, 745-769.
- Mittan, R. (1989). The peer review process: Harnessing students' communicative power. In D. M. Johnson & D. H. Roen (Eds.), *Richness in writing: Empowering ESL students* (pp. 207-219). New York: Longman.
- Vygotsky, L. (1986). *Thought and Language*. (A. Kozulin, Trans. & Ed.). Cambridge, MA: MIT Press. (Original work published 1962)
- Zhang, S. (1995). Reexamining the affective advantage of peer feedback in the ESL writing class. *Journal of Second Language Writing*, 4, 209-222.



## V. 質疑応答

ハドリー講師： それでは質疑応答に移りたいと思います。ご質問・ご意見等ありましたらお願いいたします。

木村哲夫先生： ふたつあります。ひとつは、今まであったハンドブックの使い方ですが、変わるのかどうか、もうひとつは、これは今回の改定に限った問題ではないのですが、レベル別クラス編成の場合どのようにして成績を付けるべきか、上のクラスと下のクラスで不公平にならないようにするにはどうしたらよいか迷うのですが、それについてどのようにお考えでしょうか。

平野講師： ハンドブックの担当者が本日おりませんが、当初は、とりあえず到達目標というのを目に見える形で具体化していこうということが第1の目的でありました。それをどのように実際使っていくかという点については、現在も検討中です。この問題については十分認識していますので、今後どのように有効に使っていくか、ご提案していただけるようにしたいと思っています。2点目のご質問については、恩田先生からご回答をお願いします。

恩田講師： 習熟度別クラスの成績評価については、これまで特に指針もなくやってきたものですから、学生からも（ごく一部の学生ですが）意見が出されています。自分は上位クラスでこの成績だったが、もし下のクラスに入っていればもっと良い成績がとれただろうに、といったものです。そこで、なんらかの対応をしなければと考えているところです。そこで、今回の改定に合わせて、平均点で調整をするという案を考えております。例えば、トップのクラスでは平均点を80点近くに、ボトムのクラスでは70点くらいになるように調整するといったものです。この問題は習熟度別クラスを導入している大学に共通した問題ですが、現在のところどの大学もこれといった解決策がないのが現状のようです。

木村先生： この改定で、リーディングとリスニングが分けられて非常にやりやすくなると思いますし、ネットアカデミーの活用も促進されるようですが、その他に、たとえば、リーディングなら、学生が自由に読めるような易しい本などはどこかに用意されているのでしょうか。学習支援のポータルもできたようですが、学生が利用できるような物理的なリソースはありますか。

ハドリー講師： 配付資料の新カリキュラム図にありますように、学生の自律学習支援というのが今回の改定のポイントのひとつとなっています。ポータル（資料3参照）も

そのひとつであるわけですが、今、木村先生からご指摘のあった多読用図書につきましては、平成 24 年度に開設を計画している「外国語学習支援室（仮称）」に用意したいと考えております。多読だけでなく多聴教材もそろえるつもりです。その他にも、学生のライティング支援や会話のできるスペースを設けること等も考えております。多読図書については、今のところ図書館に多数揃っていますので、そちらをご利用ください。

五島譲司先生： 2 点質問があります。ひとつは到達点です。こういった理念のもとで授業を行った後で、学生がどこまで到達したのか。各担当教員が評価するというのも大切だとは思いますが、一方、学生としては、このプログラムで学習したことによってどれくらい英語の力が伸びたのか客観的に知りたいだろうと思うのですが、この点についてはどのようにお考えでしょうか。もうひとつは、学部への橋渡しの問題ですが、どうしても 2 年、3 年くらいになると英語学習の空白が生じる。学部と今後何らかの調整をしていくのか、お考えがありましたら伺いたいと思います。

平野講師： ご指摘の 2 点につきましては、われわれも認識しているところでありますが、まだ結論が出るに至っておりませんので、ここからは、私の個人的な意見としてお聞きください。まずは、効果の測定ということで、入口と出口で測らなければ、実際効果があったのかわからない。効果を見極めないと、いわゆる PDCA をやろうとしても不十分だろうと思います。この点については、客観性を持つテストを 2 回行うという方法があります。現在は、TOEIC を 1 学期末に 1 回行っているわけですが、たとえば、それを 2 回やる。または、これは学部の方からのご意見としても出ているのですが、今後 EGAP、ESAP に特化していくのであれば、むしろ TOEFL を使うべきではないか。そういった外部試験で測定するという方法があります。ただ、現在、受験料は学生負担となっています。単位認定や TOEIC を受けること自体については学生から不満はほとんどないのですが、ごく少数の学生からはカリキュラムの一部なのになぜ受験料を徴収するのかという意見も聞かれます。それに対しては一応回答はしているのですが、さらにもう一回分負担させるとなると難しいかもしれません。もうひとつの方法としては、コンピュータ・ベースのテスト・プログラムを導入するという方法があります。仄聞するところだと、他大学や企業で現在そのようなプログラムを開発しているということです。ただ、それにしてもそれなりの予算は必要であろうし、必ず受験させるとなるとそれなりの動機付けが必要になるので、今後さらに検討していく必要があります。

2 点目のご質問について、今回の改定では、全学英语を 1 年次に集中させるということで、理学部・工学部以外は、なおさら 2 年次に空白ができてしまうということがあります。「応用英語」は残しますので、それを有効活用するのは可能ですが、学生に対して動機付けが必要になってくると思います。そこで、その動機付けをどこで行うのかということが問題になります。われわれ全学英语で行うのか、あるいは学部で行うのか。今後、全学英语と学部英語の連絡を密にする必要があると考えています。今、個人的に考えていることですが、英語教育改革 WG という形で学系から 1～2 名出してやってきた



ものがあるのですが、現在は休眠状態になっています。それを使ってよりシームレスに全学英語と学部英語をつなげていくことができないかと考えています。これは手前味噌かもしれませんが、人文学部では2年次あたりから前倒して学部英語の科目を提供していくことを考えているので、そういったモデルケースをどこかの学部で作ってうまく宣伝していくことによって全体に波及していけばと考えております。

G. ケント先生： I'm just wondering what's going to happen with the Asahi-machi campus classes, as far as time schedule is concerned. My experience is that medical students have a full schedule with their studies. Not many seem to be able to take, for example, my Monday 5<sup>th</sup> period class.

金山亮太先生： I think the Monday 5<sup>th</sup> class is Oyo Eigo. It's an elective class.

ケント先生： No. It's a HattenEigo class.

ハドリー講師： Let us review the class schedule for medical students and get back with you.

G. ディック先生： First, I'd like to thank Carmen and George for their presentations. They were very helpful. If possible, this summer, it might be helpful if Fred Durbin could say something. He is a very experienced, professional writer.

ハドリー講師： Yes. We are thinking about asking Fred to give us a model lesson this summer, along with Carmen and George.

ハンナ講師： I just want to clarify if native speakers of English teachers are going to teach any of the Hatten Eigo classes in 2011.

恩田講師： Almost all of the Hatten Eigo classes will be taught by native speaker teachers. A few will be taught by Japanese teachers.

ハンナ講師： So native speakers of English will be teaching some Hatten Eigo classes as well as academic listening and writing classes.

恩田講師： Yes.

ケント先生： Back to the class timetable, what about for night-course economics students?

恩田講師： Theirs will remain the same. This new curriculum will not apply to them.

ハドリー講師： 他にご意見ご質問がなければ、以上で終わりにしたいと思います。本日はお忙しい中ご参集くださり大変ありがとうございました。今後ともご協力の程どうぞよろしくお願いいたします。

## 【資料 3】



# 新潟大学 全学英語ポータルサイト

HOME

授業科目の紹介

履修案内

履修パターン例

学部別の履修案内

シラバス

ALC NetAcademy2

ALC NetAcademy2とは

自主学習の始め方

「基礎英語」での学習方法

TOEIC® IPテスト

全学英語ハンドブック

副専攻

おすすめ英語学習法

おすすめ図書

ネットで学ぼう

検定試験

その他のリンク

FAQ

お問い合わせ




## 全学英語ポータルサイトへようこそ

このサイトは学生のみさんの自律的な学習を応援するサイトです。

## 新着情報

2010.01.01 全学英語ポータルサイトをアップしました。

2010.01.01  『新潟大学全学英語ハンドブック』をアップしました  
音声を聞くことができます。

新潟大学全学教育機構

英語教育企画開発室

---

平野幸彦（代表）、恩田公夫、秋孝道、本間伸輔、大竹芳夫、ハドリー浩美

---